



Title	「理解」の展開史へむけて：ヴェーバーからデイル タイへ
Author(s)	序, 茂
Citation	年報人間科学. 1980, 1, p. 127-136
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4509
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「理解」の展開史へむけて

——ヴェーバーからデイルタイへ——

序 茂

I

我々が学説史の観点から「理解」の展開を追求するばあい、その考察の基点とされるのは、通常M・ウェーバーであろう。すなわち、彼の「主観的に思われた意味」をめぐる「動機」理解論である。

ところが、今日のウェーバー研究では、この基点たるべき彼における「理解」概念そのものが再吟味にさらされている。

ウェーバーの「理解」論は、論理的と心理学的という二面の視角から展開されている。今日問いなおされているのは、主に後者の視角からする「理解」である。すなわち、問われているのは、ウェーバーのいう「理解」がになっている抽象、因果性、妥当性といった論理的諸性質ではない。問題なのは、心理学的経過という観点から彼が「理解」をどう把握していたか、そこで彼は「動機」、「意味」、「解釈」などの諸概念について実質どう考えていたのか、ということである。

例えば、アメリカの研究者であるT・バーガーは最近こうのべている。

「ウェーバーは、リッカートの議論を豊かにし精錬した。そこに彼は、リッカートがまったく議論しなかったか、あるいはかりにしたとしても体系的かつ詳細にはそれを扱わなかったような諸問題をつけくわえた。」^①

バーガーはこういつて、ウェーバーのいう価値解釈、文化意義、動機理解といった諸概念を吟味しなおそうとしている。すなわち彼は、リッカートの論理学によつては裁断しにくいウェーバーの半面、なかなか彼のいう「理解」、「意味」、「解釈」などの実質の再吟味する必要を指摘しているのである。

このようなバーガーの論述は、最近のウェーバー研究の一動向をよく物語っている。なかでもJ・ハバーマスやW・アウトヴァイトなどの議論は、問題提起の域をこえて、ウェーバーのいう「理解」の実像に具体的にせまろうとしているし、日本でもこの側面からの

ウェーバー論がではじめている。³³

「理解」の学説史における基点ウェーバーという視角から、これらの議論を振り返ってみるとき、その最大の特色はなんであろうか。それは、そこではいずれにあつても、ウェーバーの「主観的に思われた意味」にかんする「動機」理解という定着したイメージが疑念にさらされ再評価されようとしている、ということである。すなわちそこでは、ウェーバーの「動機」理解論や「価値解釈」概念などが、日常生活、意味理解といった諸問題とかかわらされて論究されており、我々はそこにウェーバーのいわゆる「動機」理解論の相対化をみてとれるのである。

ところで、今日のこういうウェーバーの再吟味の努力を促しているのはなんであろうか。それは、社会学における「理解」の意義と射程が、ウェーバー以降拡大したという事情である。今日のウェーバーの「理解」の再検討の試みは、ウェーバー研究の内在的帰結というよりも³⁴、むしろ現在の社会学における「理解」の水準からウェーバーの思想を逆照射した結果である。

とすれば、学説史の観点から「理解」の展開を追求するさい、そこでの基点がウェーバーであるという我々の観念は、必然的に動揺せざるをえない。というのも今日のウェーバー研究における彼の「理解」論の再検討が、このように現在の「理解」の水準に促されての結果であるとするならば、我々は次のような問いに直面せざるをえないからである。すなわち、今日の社会学における「理解」の問題圏の領野は、その思想史的基点をもちやウェーバーに準拠していて、

は十分に把捉しきれないのではないか、という問いである。換言するならば、我々の「基点」に対する眼差は今日ウェーバーをこえて転換すべきなのではなからうか。

この問いを、我々はこの小論において、最近の学説史研究において注目をひく若干の論稿の動向を参照しつつ考えてみたいと思う。そのためにはまず、社会学における「理解」の問題圏のウェーバー以降の拡大とその特色を概略とりおさえておく必要がある。そのことによって、我々は「理解」の展開史へむけて今日どこに足場を築きなおすべきか方向を指示されるはずである。

II

「理解」という概念は、元来聖書釈義や文献解説における技術学であり、思想の世界においてはローカルな地位をしめるにすぎなかった観念である。この概念は一九世紀を通じて、F・シュライエルマッヒャーからW・ディルタイに至る流れのなかで、歴史科学の固有の方法として一般化される。ディルタイ以降、自然の把握に対して人間や社会、歴史の把握の固有性を言い立てるばあい、「理解」概念をその根拠とするということは、広く常套手段となった。

一九世紀を通じて思想の中央舞台へと浮上した「理解」概念は、今世紀に至り二種に分岐する。一方は哲学、他方は社会科学という方向である。社会学への「理解」の導入は、後者の方向において生ずる。決定的な役割を演じたのは、主にウェーバーである。

ウェーバーは、「理解」を社会学の方法に組み入れるため、二つの観点を峻別する、心理学的と論理学的の二つの観点である。「理解」を方法として彫琢するため彼の採用した戦略は、後者の観点から「理解」を穿鑿するという方策である。

この彼の戦略は、あるいみで画期的であつた。というのも、当時の「理解」論は、「理解」を科学の方法にまで高めようとしながらも、その心理学的側面に執着するあまり身動きできない状態に陥っていた。「理解」を心理学的経過という側面からみるかぎり、客観性とか妥当性といった論理学的要請はみたしにくい。ウェーバーはこの隘路を、論理学的観点をを用いることでのりこえ、「理解」を科学の方法として実用化しようとしたのである。

このようなウェーバーの努力は、両刃の剣である。論理学的議論の明晰さの背後で、「理解」の実質的過程を問う心理学観点からの議論は、断片化され外見上曖昧に霞んでしまふ。なかならず、科学における「理解」と、その対象ならびにそれらを包括している社会的世界との関連は、体系的には主題化されなかつた。

A・シュッツはまさにその点を不満とする。彼は、「理解」を科学の方法として根拠づけるためには、ウェーバーの論理学的基礎づけのみならず、「理解」の社会学的性格への考察が不可欠だと考える。すなわち彼は、社会的世界の構成様式を問いかえすことによって、方法としての「理解」を根拠づけようとするのである。シュッツはこの試みによって、ウェーバーによって社会学の方法に導入された「理解」の射程を、さらにもう一段深めることになった。

シュッツによれば、社会的現実における行為者は、日常の他者や事物との相互交渉を通じて、この世界をある意味図式へと解釈する。だから、社会科学の対象たる素材つまり社会的現実とは異なつて、その科学的操作に先行してすでに有意義に組織されている。社会学における「理解」の方法とは、じつはこの先構成されている有意義な社会的現実の、再構成に他ならない。それ故、「理解」の方法的根拠づけのためには、まず、科学そのものをも包みこみ基礎づけているこの有意義な社会的世界の構成のされ方を解明せねばならない。

「こうしてあらゆる社会科学にとって素材は前もって与えられており、この素材はすでに先科学的段階において意味および理解というあの要素を含んでいるという固有性をもっている。そしてこの要素は範疇的妥当性への要求とともに、解釈科学そのもののなかで多かれ少なかれ顕在化されるのである。」⁽²⁾

「理解」を方法として根拠づけるにさいしての、シュッツのこのような社会学的観点は、ウェーバーの論理学的考察においては背景に隠れざるをえなかつたある事実を明白に示しえた。すなわち、方法の次元における「理解」の基礎にあつて、それを包摂している社会的現実の次元における「理解」の存在である。そこでは、日常生活での行為者とその仲間、そして科学者という三者が共通にそこに属している社会的世界の固有性が、「理解」および「意味」という概念において把握されたのである。

このシュッツの介在によって、社会学における「理解」概念の意

義は二重の射程を獲得することになった。第一に、方法に先行する次元である社会的現実の固有性を、「理解」ならびにそれに付随する「意味」という概念によって総括すること。第二に、それ故に要請される科学の方法としての「理解」。すなわち、「理解」概念の射程は、ここに、科学、行為者、その仲間、これらすべてを包みこむ社会的現実へのトータルなパースペクティヴを獲得したのである。

ところで、社会学における「理解」概念の適用範囲のこのような二重化は、まさにそのトータルな視野の拡大そのものに媒介されて、類似の発想様式をとる他の人間諸科学や哲学をもその舞台としたさちにより広い「理解」の一般的問題圏との交渉を約束することとなった。なかんずくそれによって哲学における「理解」論との交渉が約束される。というのも、一九世紀の「理解」をめぐる心理学主義的な方法論議は、前述したように他方で哲学においてもまた批判的に継承されていた。「理解」のこの社会学的な進展は、哲学におけるその議論との相互交渉の可能性を開いたのである。

哲学における「理解」の根本問題を問うたE・コレートは、哲学の「理解」論は、次の三つの視角が一点に収斂する地点に成立したとのべている。^⑤第一は、シュライルマッヒャーからデイルタイを経由してM・ハイデガーに継承されていく「理解」概念。第二に、一八世紀から一九世紀初頭のJ・ヘルダー、W・フンボルトから後期のハイデガー、ならびにL・ウィトゲンシュタインへと継承されていく「言語」の問題。第三に、認識の批判的・方法的な自己根拠づけという合理論、経験論以来の問いが、カントやヘーゲルをへてフツ

サルに至って、「生きられた世界」という理念に結実していく流れ。この三つの視角が一点に合流するところに成立する哲学の「理解」論は、様々の知の枠組のなかで問われている認識論と存在論にかんする哲学的問いを、「理解」という共通の発想枠組によって統一的に組み立てなおす可能性を与えるものであり、O・ベケラーによれば、「今日解釈学の『普遍性の要求』が哲学のなかで論議される」^⑥までに至っている。

そこにおいては、「理解」とは、人間の現存在の根本的構えとして把握され、その「理解」の存在論的構造が究明される。「理解」を通じて存在が開示されるが、それは言語によって媒介される。「理解」はあらかじめの前理解と理解の循環構造において成立する。人間がそこに自己を見出す現実、理解された世界の地平であり、人間の活動はその世界の包括的な理解地平への帰属のうちではじめて可能となる。したがって、認識の主観・客観関係もまたこの世界の包括的地盤のうちではじめて生じうる派生的な関係にすぎない。

一九世紀における「理解」の心理学主義的な方法論的議論を、社会学と哲学は、それぞれ社会学的、存在論的に展開させていく。勿論、両者は学問としての観点も目標も異にする。だがそこにはまた、人間とその現実とともに「理解」というキー・概念によって把握するという共通性もある。その共通性に媒介されて、両者には相互にその成果を翻訳しあえる状況が開けるのである。社会学における「理解」概念の射程の二重化は、この翻訳可能性によってさらに広い「理解」の一般的問題圏の渦中へと自己が組み込まれることを保証した。

社会学における今日の「理解」論は、このように、ウェーバーのいわゆる古典期の時代と比較すると、はるかに広い問題圏のなかを動いている。では、このような広い射程のなかで追求されることとなった社会学における「理解」の、その今日的特徴は一体なんだろうか。これを問うことで、我々は今日のウェーバー再考の意味とともに、その再考が我々の学説史の出発点をどこに転換させていくことになるのか。示唆されるはずである。さいわい、この問題を考えるに最適の手がかりとしてW・ビュールとW・アウトヴァイトの学説史が我々には今日すでに与えられている。

III

社会学における「理解」概念は、方法の次元をこえて、社会的世界の次元にまでトータルに拡大される。そしてその拡大に媒介されて、我々の「理解」は、他の人間諸科学や哲学をも舞台としたより広い一般的な「理解」論の圏内に組み込まれる。今日、社会学における「理解」論は、広く解釈学や言語学、構造主義、深層心理学、イデオロギー批判などと相互に絡みあっている。このような現状の多様な展開は、社会学における「理解」の射程が拡大されそれによって広い「理解」の問題圏の渦中に入り込んだ、ということを背景にしてはじめて可能となる。では、このような拡大のなかで可能となった今日の社会学の「理解」論は古典期と異なるいかなる特色において性格づけられるのだろうか。

ウェーバーにおいては、明示的には、自我とその現実を意識的かつ明晰に創造していく近代的な人間像が基礎におかれている。それ故、行為の「意味」とは、行為者の主観的で意図的な思念に還元されるものである。彼において合理的な行為類型がことさら重視されるのも、このことに対応している。

ところが、「理解」の一般の問題圏を動いている今日の社会学の「理解」論は、ウェーバーとは、事情が異なるのである。ビュールは、今日の新しい「理解」論を次のように特色づけている。

「現代の理解社会学は、そのことであって方法論的な困難が増すにもかかわらず動機や主観の意味をこえて、次のような次元にまで遡源していこうとする。

動機を形成したり隠蔽したりする無意識の根源とか、社会的（経済的、政治的）諸制約。方法論的個人主義の原理によつては把握しきれないようにみえる行為の、相互主観的な基底、いなそれどころか大抵集合主義的ないし『システム論的に』すら考えられるような基底。すなわち現代の理解社会学は、このような諸次元にまで遡ろうとするのである。」³

ウェーバーの個人主義的な「理解」論は、ビュールにいわせると、主観と客観、意識と存在といった「古い二価的な発想にたつ論理学と形而上学」の産物である。現代の「理解」論は、シュッツですら「いまだ克服しえなかったこの古い人間像から自由である。今日の議論は、行為の主観的意味の背景にあって逆にそれを意味づけているより広く深い意味の層にまでその眼差をむけるのである。アウト

ヴァイトもまた、ビュールと同じく、今日の「理解」論の特色として、「行為がそこに帰属している『体系』」への関心すなわちより深く深い意味の文脈への関心の増大を指摘している。両者とも、社会学における「理解」論は、その射程の自己拡大の途上で、ウェーバー的な一九世紀までの人間観にもとづく個人主義を、相対化し克服してきたというのである。

それ故、行為や社会諸関係の「意味」は、決して主観や意識という範疇に即して限定的に固定できないものである。社会的現実の「意味」は、汲み尽くされることなく多層的でかつ多元的である。意味把握のパスpekティヴもまた、それに応じて多元的となる。社会学は、主観主義的なパスpekティヴのみならず、今やより広いあるいはより深い全体的な意味諸連関をも透視しようとする。社会学は、H・J・ヘルもまた力説するように、そういった諸々の多様なパスpekティヴを、「道具(Instrument)」として一定のドグマに呪縛されることなく自由に使いこなさなければならないのである。⁽²²⁾ 現代の「理解」論はこのように、ウェーバー的な主観主義の相対化とそこからの離反ということによって特色づけられる。とすれば、「理解」の展開という観点から学説史を問うばあい、関心として主観主義的観点のみを用意するだけでは、現状に即して不十分である。ビュールとアウトヴァイトは、そのいまだスケッチ段階にとどまる学説史把握にさいし、目的理解に対するに表現理解⁽²³⁾、心理学的理解に対するに解釈学的理解⁽²⁴⁾、という観点をそれぞれ用意している。それというのも、彼らのいう表現理解も解釈学的理解とともに、

社会学における「理解」の問題圏の拡大と、それに応じて獲得された特色すなわち主観的意味の背景たるより広く深い全体的な意味連関への眼差の転換を視野に入れようとしているのである。

今日、ウェーバーの「理解」論が再吟味にさらされているのは、このように彼以降その射程を拡大していった「理解」概念からの、逆照射の結果である。ウェーバーの思想家・歴史家としての柔軟で生きた感性は、彼自身のたてた主観主義的な方法論的原理に拘泥してはいない。実際の彼は自由で多様である。したがって論理学的側面の背後に隠れている彼の「理解」の実質的議論も多様である。そこには、自身の個人主義的な「動機」理解論に矛盾する側面も多々ある。そこに今日現代の関心から、意味理解や、科学の前提たる価値解釈の問題が読み込まれる所以があるのである。

では、このようなウェーバーの「動機」理解論の相対化の試みは、自己の学説史の眼差をさらにどこに深めていくのだろうか。それは、現代の社会学論における「理解」の問題圏の領野と、その非(あるいは反)主観主義的傾向が、どこに自己の歴史的基点を積極的に求めるのか、という問いでもある。それは、デイルタイである。

IV

近代の自然科学の発展は、知性的世界と実際の世界の両面にわたって「宇宙の合理化」を促進する。デイルタイは、それが一面人間に自由と自立の展望を開いたことを認めながらも、究極的には「合

「理化」に否定的である。そこでは、人間は「貧困化」しその「生きた全体性」を喪失せざるをえない。⁽¹⁰⁾

デイルタイは、科学や文明に対するこのようなロマンティックな反感とベシミズムを、人間に適合的な科学を形成することでのりこえようとする。すなわち彼は、「実証主義自身の武器で実証主義と戦おうとした」⁽¹¹⁾のである。人間の生きた全体性に適合したこの科学は、周知のように「精神科学」とよばれる。

デイルタイは、自然科学に対抗して、この「精神科学」を根拠づけようとする。この試みは、最終的に、歴史的認識を可能とさせている地盤である歴史的世界そのものの反省にまで突き進む。

デイルタイは、最初、「精神科学」の基礎づけとして、記述的な心理学を考えていた。

「社会的—歴史的現実の分析が獲得しうる最も基礎的な成果は、心理学のなかにある。それ故、心理学は精神の個別諸科学のうちで第一のもの、最も根源的なものである。したがって、さらに一層広い諸科学の構成の基礎となるのは、この心理学において獲得される諸真理に他ならない。」⁽¹²⁾

我々のここでの関心の的である「理解」は、この心理学の方法として導入される。というのも我々はある徴表を通してしか心的なものに到り着けない。ところでこのような「感覚的に与えられる徴表から、その徴表がその表現である心理的なるものを認識する過程」⁽¹³⁾こそ、「理解」に他ならないからである。心理学的基礎づけは「理解」による基礎づけに置き換えられる。

ここでの「理解」概念の特色は、個人主義的である。というのも、心的生の内面に眼をむけるかぎり、そこでの照準は個々の特殊な人間にそれぞれ定められる。したがって、初期のデイルタイにおける「理解」は、心理学主義的でありかつ個人主義的であった。

だがデイルタイの「理解」論は、後半変様する。

生は、体験、表現、理解という三つの諸契機の統一である。理解は表現を通じて体験における内的なものに至ろうとする。ところで、この内的なものとは、もはや心的な経過のことではない。というのも、「この内的な側面にかんする我々の知識のために、心理的な生の経過、すなわち心理学を持ち込むのは、通常おこなわれている誤謬である。」⁽¹⁴⁾からである。ここで問題なのは生における「精神的な連関」⁽¹⁵⁾である。

ところで、デイルタイによればこのような精神的なものは、したがって人間の生は、ある共通性の媒体に根源的にひたされている。その共通性を、デイルタイは、「客観的精神」と呼ぶ。

「この客観的な精神の領野においては、個々の生の表出は、ある共同的なものを代表している。それぞれの言葉、命題、身振り、作法、芸術作品、歴史的活動は、いずれも、共同性がそこでの表現者と理解者を結びつけるが故にこそ理解せられる。個々人は、つねに共同性の領域のうちで体験し思考し行爲する。そしてそのなかでのみ理解する。すなわち、理解せられるものすべては、いわばこのような共通性そのものから周知となる、という性格をおびている。我々の生は、この共同性の雰囲気の中なかにあり、それ

は不斷に我々を取り囲んでいる。」⁽¹⁹⁾

精神的な意味連関の「理解」は、このような「個々人の間に存続している共同性が感覚世界のうちに客観化された多様な諸形式」⁽²⁰⁾のなかで、はじめて可能となる。したがってすべてに先行して我々はあらかじめこの客観的精神を理解している。この客観的精神を基盤とする我々の理解は、表現と表現されたものの通常自明の「規則的な関係」⁽²¹⁾のうちにある。しかし、このデイルタイのいう「基本的な」理解は、たえずある「不確かさ」すなわち「隔たり」(Distanz)に突き当たる。「理解」はその限界を突破するべくより高次のものとなる。すなわち、「理解」は、「別の生の表出を引きあい」にだしたり、生連関の総体へと遡源したり⁽²²⁾することによって、新たな高みからその謎と化した事象を把握しなおそうとする。「理解」とは、客観的精神に媒介されて遂行される、基本的な「理解」とより高次の「理解」の相互循環として成立するのである。精神科学の方法としての「理解」も、このような性格をもった「理解」のひとつの派生態に他ならない。

このデイルタイの後半における「理解」論は、もはや心理学主義的でも個人主義的でもない。「理解」の対象は、共同的な世界であり、それを表示する生の諸々の客観態である。そこでの個別は、より広い生の諸連関の全体からその意味を受け取る部分に他ならない。「理解」の対象は、心的なものではなく精神的な連関を共同性において産出していく生、いわば普遍的な精神の全体に転換されるのである。

「この結果同時に、了解というようことが生起する視点の転

換が起ころ。つまり、もはや個々の人間が了解されるのではなく、世界と全体としての生、言いかえれば、人間をとり巻き、彼がそこで他者との共通性を見出す世界が了解されるのである。普遍的な世界および生の了解と言った方がよいであろう。この世界の中で人間に出会うものは、すべて彼によって了解されうるのである。」⁽²³⁾

このようにデイルタイの「理解」論は、前半の主観主義的傾向から「客観的な転回」⁽²⁴⁾をとげた。そこで問題なのは、精神的な意味連関のより広く深い全体的文脈である。

今日、我々の眼差をひきつけるのは、他ならぬ、デイルタイの「転回」とそこでの主観主義の克服である。すなわち、社会学における「理解」概念の意義と射程は、科学の方法のみならず、科学をも包みこむ社会的現実のトータルな総体そのものにまで拡大された。そしてまさにそのことに媒介されて、我々の「理解」論は、より広い「理解」の一般的な問題圏に組み込まれることになった。このような問題圏の拡大のうえにたつ今日の社会学の「理解」は、主観や意識という旧い観念にもとづいた個人主義からの離反として、特色づけられる。そこでは、主観的意味の背景にあつて逆にそれを意味づけるより広く深い全体的な意味連関へと、パス・スペクティヴが転換される。それ故、我々が学説史の観点から「理解」の展開を追求するばあい、その思想的基点をウェーバーに求めるかぎり、このような現状の性格に十分適合しえない。この現状に促されてすでに、ウェーバーの主観主義の相対化が試みられているが、このような努

力は、現代の「理解」の展開状況をその原点として用意しうる対象へとさらに転換されていくべきものであろう。それが、デイルタイなのである。

例えばビュールは、前述したように、理解社会学の性格と展開を把握するため、目的理解に対して表現理解というパースペクティヴを用意する。彼は、この視角の基点をウェーバーをこえて後期のデイルタイへまでひきもどしている。デイルタイこそ、この今日のパースペクティヴに即してみれば、「理解の方法論のために全く決定的に寄与した」⁽²⁵⁾人物といえるのである。アウトヴァイトもまた、今日の非（反）主観主義的傾向の学説史的基点をウェーバーをこえてデイルタイにもとめる。すなわち彼は、今日の傾向とそのために彼が用意した解釈学的理解という視角の原点を、彼が「全体論的 (holistic)」と性格づけている後期デイルタイの「理解」論に求めるのである⁽²⁶⁾。

このように我々が今日、ウェーバー以降の社会学における「理解」の展開を踏まえて学説史を追求しようとするとき、我々の眼差はウェーバーからデイルタイへと転換せねばならない。すなわち今日、社会学説史においての本格的なデイルタイ研究が必要である。その作業は、今日の非常に拡大した「理解」の問題圏を的確に把握するためのすぐれた足場となるだろう。アウトヴァイトは適切にもこのべている。

「社会思想の若干の重要な動きは、次のところにあるようだ。すなわちウェーバーをこえてデイルタイへという遡源である。あるいは少なくともこういつてよからう。最近の社会思想は、ウェー

バーをこえてデイルタイが他の一九世紀ないし初期二十世期の思想家達と共有していたある一般的な諸々の先入観へと逆のぼりつ、あると。」⁽²⁷⁾

(註)

- (1) Thomas Burger: Max Weber's Theory of Concept Formation History, Laws, and Ideal Types. 1976. North Carolina. p94 (ただし、T・バー自身は結論的には、大体においてウェーバーはリッカートの枠内にとどまったという)

- (2) この種のウェーバーの「理解」論の再吟味を企て、いる文献として、例えば Jürgen Habermas: Zur Logik der Sozialwissenschaften. 1970. Frankfurt. a.M. S.81-91. William Outhwaite, Understanding Social Life. The Method called Verstehen. 1976. London. pp.38-55 厚東洋輔「ウェーバーと『意味』の社会学的把握」『大阪大学人間科学部紀要』第三巻、一九七七年、序茂「M・ウェーバーにおける理解社会学と解釈学——序説——」『社会学評論』第二九巻第四号、一九七九年、などを参照。
- (3) ウェーバーの「動機」理解論の相対化自体は、シェルティンクの時代からすでにあった。ただこの議論は、内在的に継承され発展することになった。

Vgl. Alexander von Schelling: Max Webers Wissenschaftslehre. 1934 Tübingen S.353ff.

- (4) Alfred Schütz, Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt. Eine Einleitung in die verstehende Soziologie, 1974. Frankfurt, a.M.

S.18

- (5) Vgl. Emeric Coreth. Grundfragen der Hermeneutik. Eine philosophischer Beitrag. 1969. Freiburg, Basel, Wien. S.26~54
- (9) Otto Pöggeler her.Hermeneutische Philosophie. 1972. München. 瀬島豊雄他訳『解釈学の根本問題』一九七七年、晃洋書房、八頁
- (7) Walter L.Bühl her., Verstehende Soziologie. Grundzüge und Entwicklungstendenzen, 1972. München. S.9
- (8) ibid. S.16
- (6) W. Outhwaite op.cit. p.83
- (10) Horst J. Helle. Verstehende Soziologie und Theorie der Symbolischen Interaktion. 1977. Stuttgart. S.26~34
- (11) W.L. Buhl ibid. S.31~36
- (12) W. Outhwaite, op.cit. pp.15~17
- (13) ハイムタウの「現代」把握について、ヘルム・Wilhelm Dilthey. Gesammelte Schriften (GS.) Bd.8. 5Auf1.1977 Göttingen S.190~205
- (14) Stuart Hughes, Consciousness and Society, 1958, New York. 生松敬三、荒川幾男訳『意識と社会』一九七〇年、みすず書房、一三三頁。
- (15) W. Dilthey G.S. Bd.1 7 Aufl. 1973 S.33
- (16) G.S. Bd.5 6 Aufl. 1974 S.318
- (17) G.S. Bd.7 6 Aufl. 1973. S.84
- (18) ibid. S.83
- (19) ibid. S.146~147
- (20) ibid. S.208
- (21) ibid. S.207
- (22) ibid. S.210
- (23) Otto F. Bollnow, Dilthey—Eine Einführung in seine Philosophie. 1955 Stuttgart 麻生建訳『ハイムタウ』一九七七年、未來社、二八二頁
- (24) E. Coreth ibid. S.29
- (25) W.L. Buhl ibid. S.33
- (26) W. Outhwaite op.cit. pp.24~37 p.83
- (27) op.cit. p.105